

明治の佐伯三青年 (21)

龍溪・鳴鶴・鶴谷

御手洗 一 而

矢野官界入り

(賛助会員・川越市小堤)

佐藤蔵太郎の動き

西南戦争後、武力抗争を捨てた士族の自由民権運動は、愛国社のような結社の形をとったが、期待していた庶民層を吸収する運動までには至らなかった。その代り、さきに公布された「地方三大新法」は、各地の農工商三民を結集する別の運動体の県議路線の母体となり、国会開設を目標とする民権運動も、ようやくにして、国民運動へ展開する足取りを固めつつあった。

藤田は時節の到来をひしひしと感じながら、社説をもって、煽動すべきかどうか迷っていた。矢野の出仕後、手薄になった報知社には、再び箕浦や加藤の同僚が、遊軍の形で入社し、連日議論が交わ

されたが、彼等が悩むにはそれなりの理由があった。

藤田や箕浦が讒謗律で入獄したことは前に書いたが、箕浦は下獄後一旦慶応義塾に帰り、義塾発刊の「家庭叢談」の編集を手伝っていた。この雑誌は、再び明治十年四月に、旧名の「民間雑誌」に復して、この年の三月一日より日刊紙として出発していた。ところが、去る五月十四日の大久保内務卿暗殺事件の翌日、同紙に載せた「内務卿の凶聞」という社説が、当局に睨まれることになり、当時編集責任者の加藤政之助は、警視庁に呼び出されて、発行停止及び禁止か、あるいは今後このような論説は書かないという、誓約書の提出を申し渡された。

この報告を聞いた福沢は、自由を束縛する政府は相手にせず、誓約書の代りに廃刊届けを出して知らぬ顔をした。こんな経緯があつて、矢野の出仕後、福沢の門下生が再び報知社に集まっていたわけであるが、彼等には前歴があるだけに、論説陣は社の方針を決めかねていた。

そんな時に、矢野や藤田の少年期の恩師であつた楠文蔚が、政府に出仕の打ち合わせのため上京してきた。二人は早速恩師を新橋に招待して昔話に花を咲かせた。楠

は二人の成長に眼を細めたが、

「さすがに政府のお膝許だけあって、東京は活気がある」

と、驚いた様子だった。

話は自然に西南戦争の時の旧藩士の動向や、近頃の民権運動の兆候にまで及んだ。

「ほう。佐伯でもそんな動きがありますか」

藤田は感心していた。

「新法の設定以来、士族が吸収し得なかった民衆の力が自然に組織を作りつつある」

矢野は出仕後の新しい情報と共に、肌を感じていることをつけ加えた。

「そういうえば、それがしが上京する一寸前にも、佐伯で初めての政治的会合がもたれたらしい。今は有志の集まりだが、青年層も大分同調していると聞いている」

楠は近況を知らせた。

「愛国社の幹部が全国を遊説して歩いたように、演説という武器が広がっている。佐伯も遅ればせながら動き始めている」

藤田は妙な感心の仕方をしていたが、矢野はすかさず問い返した。

「誰が音頭をとって有志をまとめているのであろうか」

矢野はその方に興味があった。

「何でも佐藤蔵太郎等が中心らしい。この男も暫くわしの塾に通っていたが、今では師範学校伝習所を出て教職にある」

楠は一口で簡単に説明したが、矢野はこの時初めて佐藤蔵太郎の名前を知った。

この佐藤は、西南戦争の時に薩軍の豊後侵入をいち早く県庁に知らせたことは前に書いたが、幼時から文才に富み、楠塾などで漢学を修めたが、それだけでは物足りなく、当時各県に新設した師範学校で学び、郷里に帰って教鞭をとっていた。

この頃の青年は、従来の漢学一辺倒から一歩前進し、皆洋学に憧れていたが、上京して洋学を学べるのは、家庭の恵まれた若者に限られ、好学の士は各県の師範学校入学が精一杯であった。だが佐藤はそれだけでは満足出来ず、西南戦争が終ると、感ずるところがあって、再度中津市学校に学ぼうとして佐伯を出た。

中津は福沢の生地であり、矢野や藤田の活躍を聞くにつけ、洋学への夢が絶ち切れなかったのであろう。だが佐藤は、中津に行く途中、大分で事故にあい、やむなく当地で安部淡齋に学んだ。事故にあって、洋学の夢をたれた佐藤は、その後帰郷して教職にあったが、生一本な彼は、県下の教育事情にあきたらず、建白書を出したり、当局の怠慢を詰責したり、それらの不満が民権運動へ眼覚める動機となりつつあった。

更に佐藤は、若くして文章や詩文に長じていたが、西南戦争を境にして、翻訳物の出版が、佐藤の眼に新しい変化をもたらしていた。矢野が東京と佐藤を結ぶ読書会を試み、佐藤へ送った翻訳書など、佐藤は多分に影響されたに違いない。

当時の文学界について、明治八年四月の東京日日新聞の社説には、「歴史には維新史すらくなく、小説伝奇は十年来廃絶し、脚本、地を払い、新作狂言醜を極め、和歌連歌俳諧又衰微してしまつたが、ただ盛んなものは、翻訳書の出版だけである」と、その実状を論じている。

これら翻訳書の中でも、佐藤がもっとも感銘し共感を
得たのは、この年十一月に刊行された「欧州奇事・花柳

春話」であった。主人公マントラパスが、読書著作を禁じられて議員となり、イギリス政界の裏面を小説にとり入れた内容は、佐藤の頭にこびりついて離れず、異様な新鮮さに映った。

丁度その頃、塩屋学校の教職にあった佐藤は、必ずしも教員仲間評判はよくなかった。実力と声望をねたまれたこともあるが、生来の生一本と、妥協を許さない彼の性格が、災になることが多かった。佐藤はこれらの事情を「花柳春話」の内容におきかえることにして、一つのヒントを得た。そして、教育界の怠慢と自分の置かれている位置、又これを通して政治に結びつけることを考え、青雲の志にかえて「月水奇遇・艶才春話」という小説の執筆にとりかかった。佐藤が菊亭香水と号して、中津で刊行した「田舎新聞」に投稿したのもこの十一月であった。

こうして佐藤は、のちに演説会を開き、七十余名の青年層を吸合して、久敬社という政治結社を組織することになる。

大蔵省検査局に出仕した矢野は、その後大隈邸に足を

運ぶことが多くなつたが、そこで矢野は、小野梓という小兵と懇意になつた。小野は土佐宿毛の出身で欧州から帰ってきたばかりであつた。義兄の紹介で大蔵省に出仕し、大隈卿の知遇を得ていたが、「要路大臣の妾を駿す」や、第二回地方官会議の「議案批評」など、はげしい論評を書いて、矢野が知つた時は、法制局に廻されていた。

小野は小柄で、矢野よりも二つ三つ年下の藤田と同年輩に見えたが、学問才略は群をぬき、財政通でもあつた。又小野は官費留学生で、矢野と同局の五人も皆洋行帰りであつた。その点矢野は肩身の狭い思いをしたが、小藩育ちの矢野は、洋行の機会に恵まれず、いつか実現せねばという大志を抱くようになっていた。

当時の検査局とは、今日の国会の予算議決権をもつ役目を課せられていたが、矢野は予算の歳入歳入に關して「臨時」に対して「經常費」という新しい經濟用語を造り、今尚使われている。矢野がこの造語を使用するまでは、「通常」という語句を用いていたが、ある日矢野は唐の名相陸贄の「陸宣公奏議」を読んで、その中から「經常の費」という文字を見出し使用したと、後日談話で述懐している。

役人になつた矢野は、当初こそ神妙に構えていたが、仕事が慣れてくると、そろそろ「民権の矢野」が頭をもち上げてきた。「民権の矢野」とは、塾の教師時代に生徒がつけたあだ名であるが、こうした風潮を苦慮した政府は、翌明治十二年が明けると、早々に官人が公衆を集めて「講談論議」することを禁じた。

たまたまその翌日は、沼間守一が主宰する嚶鳴社の月例会の日であつた。矢野は沼間の身を案じ、藤田を誘つて演説会場にそつと顔を出したが、沼間は、柳橋万八楼に集まつた同志百数十人の前で、堂々と政府の攻撃をして社員の拡大を勧誘した。矢野や藤田はその迫力に圧倒されたが、その後賛同者は各地に及び、東北関東一円に二十九の嚶鳴社支社が出来、社員も千人をこす一大結社となつた。

だが、さすがの沼間も、もはやこうなつては官をやめざるを得なかつた。沼間は、やがて元老院を去り、「横浜毎日新聞」を手中におさめることに成功する。

こうした民権派の動きは、朝野を問わず全国的に広がりつつあつたが、何かがあると頭を痛めるのは報知の論

説陣であった。沼間の演説を聞いた藤田は、翌日出社すると、早速皆にその様子を知らせた。寒さも手伝ってか手には茶碗酒が握られていた。

「沼間さんには恐れ入った。官人の演説禁止令が出るとされれば官人をやめれば文句はあるまいと言う。実にいさぎよい。事を成すにはあれでなければならぬが、このわし等はおとなしすぎる」

藤田は一人で意気込んでいた。

「それも道理だが、こう頭を叩かれては立つ瀬がない」
いつも大人ふうの箕浦も、腹の底では藤田に同調していた。

「何しろ三田の大将は変り身が早すぎる。余りおとなしく構えていると、他社にも先をこされる心配がある」

藤田の不満であった。酒好きの藤田は一杯機嫌になるとこんな言い方をする。三田の大将とは福沢のことであるが、沼間は禁止令が出た翌日に演説をおち、福沢は誓約書をとられかかると直ぐ廃刊にする。この違いが気性のはげしい藤田には物足りなかった。

「先生も何か考えておられるわい。だが、他社に負けるのは面目が立たぬ。わし等にも意地がある」

こう言うのは加藤であった。

「少しあおってやるか」

藤田は真一文字に口を結んでいた。

連日、藤田の苦悩は募るばかりであったが、三月になると一つの行動が起された。

愛国社の第二大会が三月二十七日に開かれ、府県会開催と共に、各県議集結の試みも千葉県の桜井静によって行われた。

桜井はその席上、

第一、全国県会議員親和聯合する事

第二、東京に一大会を開設して、国会設立の法案を議

決する事

第三、政府に懇請して国会開設の認可を得る事

以上の三ヶ条を提案した。

藤田はこの時とばかり提案を支持し、報知でとり上げて論陣を張った。朝野新聞を始め、各新聞社も競って全国的に報道し、この議決は一万部が全国各議員に配られた。

国会開設の運動は、沼間のように政府部内にも急進的

な論説があり、府県会が動き出すと、今や国民的な世論の動向となって無視することは出来なかった。まして、各社の競争に遅れることは、藤田等にとっては最大の恥辱であった。

維新後十年たって、文明開化が進み明治国家の建設期にいと、維新に乗り遅れた者や藤田等の如く若かった者は、「維新は薩長に遅れたが、明治国家の建設は俺達がやる」という自負があった。この年、藤田はまだ三十歳に満たず、若さもあつたが、この時代の言論を背負う記者達は、おしなべて一くせも二くせもある連中が多かつた。

維新が改革の志士を必要としたように、この頃の記者達は建設の志士として血の気が漂い、容易に武士的姿勢をとり除けるものではなかつた。武力こそ否定しても、根底にある気概は、まだ維新の延長線上にあつた。

報知社内でも箕浦や加藤は割合に穩健であつたが、藤田は錐きりのような男である。当然突きささねばならない時はよいが、後日鉤かんなで削つた方がよかつたかなと思ふ時がある。だが、それも他人が見る客観性であつて、本人は一応の見通しは立てている。唯その見通しが正論であ

つたかどうか、のちにそんな事に頓着するような男ではなかつた。

酒の上のこととはいえ、藤田が時折り師の福沢の行動に対して、物足りないぐちをこぼすのは、やはり性格の違いであつたかもしれない。

しかし、このような報知の論説陣の煩悶がわからない福沢ではなかつた。福沢は、使いを出して藤田と箕浦を呼び寄せた。藤田は、藤田の書生で社の雑報記者をつとめていた朝比奈から、その伝言を聞いた。

「今頃何の用事であろうか」

二人は、福沢の急用に思い当らず、じつと考えこむふうであつた。

次号原稿ノ切日

十二月三十一日

よろしく御願ひ致します。